

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 11 日現在

機関番号：37503

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720031

研究課題名（和文） 近代マレー思想の諸潮流—折衝と構築—

研究課題名（英文） Modern Malay Thoughts: Negotiation and Construction

研究代表者

井口 由布（IGUCHI YUFU）

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・准教授

研究者番号：80412815

研究成果の概要（和文）：本研究は、「マレー」「マラヤ」「マレーシア」などにかんする諸思想を 18 世紀末から現代まで歴史的にたどることによって、マレーシアにおける国民的なアイデンティティの形成のなりたちを思想史的に読み解くものである。「多民族社会マレーシア」という言説は二段階を経て形成されている。第一の段階は 19 世紀半ば以降のイギリスの植民地の進展にともなっていた。ここでマレー半島（マラヤ）は意味のある空間として形成されたが、移民たちは不可視の存在であり「多民族社会」という言説は成立していなかった。第二は、第二次大戦後のイギリスによるマラヤ連合案やアメリカ合衆国を中心とした地域研究のなかで、「plural・ソサエティ」という言説が登場し、支配的な地位を獲得していく段階である。この段階において、マレー人、中国人、インド人が均質なエスニック・グループとして言説的に構成され、マラヤ（のちにマレーシア）は、「多民族社会」であるという表象を獲得する。しかしながら、「多民族国家マレーシア」へと収斂されていくこのような過程は、支配的な言説の構築によって抹消されてしまう異質で雑種的なものとの折衝の過程でもあった。汎マレー主義者だけでなく保守主義と分類される論者も、意味ある空間としてのマレー半島の自明性やエスニック・グループの均質性に異議を唱えていた。その折衝の過程では、現在のマレーシアとは異なる可能性が提示されていただけでなく、あらゆる国民国家の境界に疑義を示す雑種的なものの可能性が示されていた。しかしながら、それらは国民的な言説の支配性の確立のなかで消去されていった。

研究成果の概要（英文）：This study traces the history of thoughts on “Malay”, “Malaya” and “Malaysia” from the late eighteenth century up until now and explores the formation of national identity in Malaysia from the viewpoint of intellectual history. The predominant image of Malaysia as “a multi-ethnic society” was formed in two stages. The first stage was associated with the progress of British colonial administration since the mid-nineteenth century. At that time, the Malay Peninsular (Malaya) was constituted as a meaningful space. Yet, the immigrant communities were not perceived as the components of Malaya so that the discourse of “a multi-ethnic society” was not formed in the first stage. The second stage started after the World War II when Britain suggested the plan of Malayan Federation and the United States promoted area studies for the establishment of its hegemony. The concept of “plural society” emerged and became predominant in representing Malaya (later Malaysia). It was at this stage when the Malays, the Chinese and the Indians were discursively constructed as homogeneous ethnic groups and Malaya obtained the predominant representation of “a multi-ethnic society”. However, the process that was converged on the national discourse of a multi-ethnic Malaysia simultaneously involved the process of negotiation with the heterogeneous “others”, which was removed from the formation of dominant discourse. It is not only the Pan-Malay thinkers but also the so-called conservative thinkers who have questioned and problematized the self-evidence of the Malay Peninsula as a meaningful space and the homogeneity of ethnic groups. In the process of negotiation, they implicitly suggested the heterogeneous “others” that question the concept of boundaries of nation states as well as the alternative possibilities to the present Malaysia.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：マレーシア、マレー、国民、アイデンティティ、ナショナリズム、折衝

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景は、近年の人文社会科学の諸分野における、西洋の国民国家を理念的なモデルとした従来の国民国家論の批判的問いなおし作業である。そこでは、ベネディクト・アンダーソンが『想像の共同体』において指摘したように、国民は均質で有機的な超歴史的な統一体なのではなく、歴史的社会的に構築されたものであることが明らかにされる。

マレーシア地域研究においても上記のような批判を受けた研究が展開している。アリフィン・オマール『バンサ・ムラユ』(1993)やアンソニー・ミルナー『植民地マラヤにおける政治の発明』(1994)などの研究が、「民族」「国民」「エスニック・グループ」などを本質主義的ではなく、歴史的に構築されてきたものとしてみなそうとしている。構築主義的な立場からものごとをみなそうとする立場は、マレーシア出身の学者たちにも共有されている。とりわけシャムスル・A・Bは構築主義的観点からいくつかの論文を発表している。

日本におけるマレーシア地域研究においても構築主義的な立場からアイデンティティをみなそうとする研究がじょじょに登場している。吉野耕作の論文「エスニシティとマルチエスニシティ」(2002年)や左右田直規の論文「教科書におけるマレー世界」はいずれも「マレーシア」や「マレー」を超歴史的で本質主義的な概念としてではなく、歴史的に構築されてきたものとしてみなしている。また、マレーシアのなかでもサバという地域に着目し、そこにおけるさまざまな構想の交渉過程をたどった山本博之の著書『脱植民地化とナショナリズム』(2006年)も、アイデンティティを歴史的につくられたものとしてみなそうとする立場から論じたものである。

2. 研究の目的

本研究の全体構想は、「マレー」「マラヤ」「マレーシア」などにかんする諸思想を18世紀末から現代まで歴史的にたどることによって、マレーシアにおける国民的なアイデンティティの形成がどのようになされてきたのかを思想史的に明らかにするものである。報告者は、博士論文(「マレーシアにおける国民主体形成——地域研究批判序説——」)において「マレー」「マラヤ」「マレーシア」などにかんする言説の歴史的な系譜を、植民政策学、地域研究、自国研究の成立過程からたどるという研究を行ってきた。その際における研究は、現在のマレーシアという国民国家へ収斂していく方向での諸思想の検討が主であった。これにたいして本研究では、インドネシアやフィリピンとの合同をも視野にいたした「マレー世界」や「大マラヤ」構想など、植民地宗主国の構想を超えた現地の側からのさまざまな思想が、対立や合意をしながら形成されていくありようを検討する。すなわち本研究は近代マレー思想の諸潮流を折衝と構築という観点から検討することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 方法論に関する探究：表題にある「折衝と構築」についての方法論的探求を主に行った。アントニオ・グラムシの折衝とヘゲモニーの概念、ミシェル・フーコーの言説とその実定性、それらを文化テクストの分析に利用したスチュアート・ホールの議論やエルネスト・ラクラウの議論、本研究の最初のきっかけを提供したエドワード・サイードの『オリエンタリズム』における言説上の構築体としての「オリент」と『文化と帝国主義』における対位法について検討した。

(2) マレー人保守：保守の代表的知識人と

してザイナル・アビディン・ビン・アフマド (Zainal Abidin bin Ahmad, Za'ba) をとりあげた。マラヤ独立前の 1950 年代にシンガポールで出版されたマレー語雑誌 (アラビア表記) 『カラム (Qalam)』に掲載された諸論考や、独立後に国立言語出版局が出版した『デワン・バハサ (Dewan Bahasa)』に掲載された論文を検証した。

(3) マレー人左派：汎マレー主義の思想家として知られるイブラヒム・ヤアコブ (Ibrahim Yaacob) とブルハヌディン・アル・ヘルミ (Burhanuddin Al-Helmy) をおもにとりあげた。イブラヒムにかんしては『祖国とマレー民族 (Nusa dan Bangsa Melayu)』

(1951 年)、ブルハヌディンにかんしては 1950 年から 1951 年に雑誌『カラム』で連載された「祖国情勢 (hal ehwal tanah air)」などを検討した。

(4) イギリス側の構想 植民地時代の教育制度とそれにかんする言説の歴史をたどることをとおして、イギリスによる植民地社会のまなざしの変遷を跡づけた。

(5) 非マレー系住民の動向：非マレー系住民の教育制度の歴史を整理し直し、独立期の国語問題における対応を検討した。

#### 4. 研究成果

研究開始当初はマレー人保守やマレー人左派というカテゴリーを便宜的に設定したが、研究の過程で明らかになったのは、このようなカテゴリー自体が問いなおされなければならないことである。「マレー」、「マラヤ」、「マレーシア」をめぐる言説は流動的で、一人の論者であっても変遷があったからである。

「多民族社会マラヤ (のちに多民族社会マレーシア)」という言説は、二段階を経て形成されている。第一の段階はイギリスの植民地の進展にもなってマレー半島 (マラヤ) が意味のある空間として形成される段階である。この時には多民族社会という言説は登場しない。第二は、第二次大戦後のイギリスによるマラヤ連合案やアメリカ合衆国を中心とした地域研究のなかで登場した「プルーラル・ソサエティ」という言説が支配的になっていく段階である。この過程で、マレー人、中国人、インド人が均質なエスニック・グループとして言説的に構成されたといえる。

現在の「多民族国家マレーシア」へと収斂されていくこのような過程は、他方で異質で雑種的なものとの折衝の過程でもあった。異議の一つは、意味ある空間としてのマレー半島にたいして唱えられた。マレー半島の自明性に疑義をさしはさんだのは、反植民地主義者であり汎マレー主義者であるイブラヒムだけではなく、マレー人保守と考えられてきたザッバもであった。だが忘れてはならない

のは、マレー諸島をこそマレー人の祖国であるとするイブラヒムの汎マレー主義を培ったのが、マレー人の土着的な思想というよりはむしろイギリスによる教育をとおしてであったことである。すなわち植民地に対抗する思想は植民地主義との折衝の過程において生まれてきたということである。

また、エスニック・グループの均質性にも異議が唱えられていた。マレー人の均質性という言説では、マレー半島のマレー人たちはマレー半島の先住民であると考えられている。しかしながら、マレー半島のマレー人のなかにはマレー諸島の他の地域からの移民が多くふくまれており、マレー語を話さないブギス人やミナンカバウ人を祖先とし、しかもそのことを了解している人々も多かった。マレー人の雑種性はマレー半島の境界を汚染する矛盾の存在であった。汎マレー主義は、このような矛盾をマレー諸島内部における差異として表現しようとしたのである。だが、そのようなマレー人の雑種性は、「多民族社会マラヤ」という言説の支配が確定していくなかで抑圧された。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ①井口由布「マラヤ大学医学部設立計画にみる医学的な知の制度化——国民・ジェンダー・エスニシティ——」『政策情報学会誌』5 巻 1 号、2011 年 11 月、5～18 ページ。査読有
- ②井口由布「多文化環境における研究と教育——立命館アジア太平洋大学の事例を中心に——」『日本近代学研究』第 33 号、2011 年、177～200 ページ。査読有
- ③井口由布、近藤まり「劇場ホテルにおける刊行文化の形成——インドネシアにおけるリゾートホテルの調査をとおして——」『社会システム研究』23 巻、2011 年、23-48 ページ、査読有
- ④IGUCHI, Yufu, “Formation of Social Sciences in Malaysia: Contesting Meanings of ‘Plural’ in Malaysian Studies” (*Ritsumeikan International Affairs* Vol. 9, February 2011) 121～143 ページ、査読無

[学会発表] (計 6 件)

- ①IGUCHI, Yufu, “Otherness in the National Canon: (De)Constructing the Father of the Malay Language” (2nd International Conference, International Association for Asia Pacific Studies, Ritsumeikan Asia Pacific University, November 27, 2011)
- ②井口由布、近藤まり「APU における「東南アジア研究入門」3 年間の歩み—多学部・

多教員・多文化の試み」パネル1 大学における東南アジア入門教育の現状と課題（第83回研究大会、東南アジア学会、愛知大学、2010年6月6日）

- ③ IGUCHI, Yufu, “Globalization and the Teaching of Gender Studies: Questioning the Western-nation-state Oriented Gender Studies through Educational Practice（グローバル化とジェンダー研究・教育——教育実践を通じた西洋国民国家中心主義的ジェンダー論の問い直し——）小シンポジウム IV Global History under Globalization: Current Issues in Research and Education（グローバル化とグローバル・ヒストリー：研究と教育の国際比較を中心に）（第60回大会、日本西洋史学会、別府大学、2010年5月30日）
- ④ 井口由布「マレーシアにおける「多民族社会」イメージの形成史：植民政策学から地域研究へ」（大阪大学歴史教育研究会、大阪大学、2010年4月17日）
- ⑤ 井口由布、近藤まり、笹川秀夫、田原洋樹「特殊講義東南アジア研究入門3年間の歩み——多学部・多教員・多文化の試み——」（東南アジア学会九州地区研究会、第25回 APU 東南アジア研究フォーラム、立命館アジア太平洋大学、2010年3月24日）
- ⑥ 井口由布「多文化環境における教育と研究の実践報告」（京都大学地域研究統合情報センター、APU 東南アジア研究フォーラム、東南アジア学会九州地区例会、日本マレーシア研究会 (JAMS) 社会連携フォーラム、2009年7月18日）

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

井口由布 (IGUCHI YUFU)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・准教授

研究者番号：80412815

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：